

さすらいの小川未明

—「あこがれと幻滅の美」の行方

関 英 雄

大学で児童文学の講座を受講した学生が、卒業論文に選ぶ日本近代児童文学の作家・作品論では、宮沢賢治がダントツで多く、次いで新美南吉、小川未明である。この三人が卒論の御三家というのは、ここ十数年の私の教師体験と見聞からいえる。

私が担当講師の場合、作家論または作品論と学生に指示するだけで、作家を特定しないから、昭和六二年度の本学の短大文芸科のゼミの学生の卒論でいえば、C・H・ルイスやワイルダーのような欧米の人気作家もあれば、日本の現代作家では松谷みよ子や佐藤さとるもあった。が、日本の近代作家では新美南吉こそ欠けていたが、宮沢賢治と小川未明は、依然として複数の論考があった。

賢治の童話は近代古典として定着し、その読者層は広く厚い。賢治には及ばないが、南吉も現に老若各層に広く読まれている。この両者はその定本の全集と文庫本が、版を重ねているだけでなく、子どもの本としても、旧刊新刊がたえず市場に出ている。

だが小川未明はやや事情を異にする。十一年前に講談社から全十六巻の定本の童話全集が出たが、これは早くも忘れられようとしている。子どもの本としてはだいぶ前からめったに刊行されなくなり、わずかに二、三の文庫本による代表的作品集のみが、永続的に発行されているのみだ。出版状況から見ると、未明童話の読者は、少数のファンと研究者を除いて、著しく減ったと思われる。

それにもかかわらず、学生の卒論に未明が御三家の位置を保ち続けているのはなぜか？ 賢治、南吉が三十七歳、三十歳の若さで夭折したのに対し、大正デモクラシーの時期から昭和初頭までの壮年時代の作品（有名な「赤い蠟燭と人魚」始めロマチックな空想童話の代表的作品群はこの時期に集中している）を除いて、晩年は見るべき作品もなく七十九歳まで生きた未明の姿が頭をよぎる。

小川未明（一八八二—一九六一）は、近代文学としての童話（メルヘン）を日本で初めて開拓した児童文学史上の巨星であり、学生が卒論で論じて当然だが、私の見る限り、学生の多くが文学史的評価から未明を選んだとは思われない。彼らは賢治や

南吉の作品に魅力を感じたと同様に、未明の代表的な童話（すべて短編）のいくつかを読み、心を惹かれたからさらに読み進み、手に入る研究資料などで初めてこの作家の輪廓を知り、卒論のテーマにしたと考えられる。では、彼、彼女たちは、未明童話のどこに魅力を感じたのか？

未明の壮年期と重なる私の十代半ばの少年期、当時の童話雑誌で愛読した未明童話、「阿呆鳥の鳴く日」「北海の波にさらわれた蛾」はか多くの作品が私に残したイメージは、どこか遠い夕焼けの雲の彼方に、貧富の隔絶や人間の争いのない平和な楽土がある、だがそこへはだれも容易に達することができないというあこがれと幻滅の情感だった。そういうイメージの作品ばかりというのはなかったが、あれこれ読む中で総括されたイメージがそうだった。

大正・昭和初期の未明童話は、夢幻的なロマンチズムと、社会的弱者の連帯の思想に立つヒウマニズムの融合した作風で知られる。このロマンチズムとヒウマニズムの根拠は、未明が晩年まで座右の書としたのが、ロマン派の聖書といわれたドイツ

・ロマン派の詩人ノヴァーリスの散文詩的長編「青い花」と、アナキズムの教典とされたクロボトキンの「相互扶助論」であったことで察知される。

そして『赤い鳥』の創刊（大正七）以来の大正後期はデモクラシー思潮の昂揚から、社会主義運動も活潑化し、大杉栄らのアナキズム思想が労働運動の中に影響力をもった時代である。未明の思想はこれと連動していた。だが一切の権力否定のアナキズムは、もともと空想的社会主義であり、現実の厚い壁の中で、「人間が変わらねば社会は変わらぬ」という心情主義へ未明が傾いて行ったことは、若い頃から未明の知遇を得た私が、この大先輩の言説から知るところだ。加えて「現実とは仮象であり、夢こそ現実である」とするノヴァーリス流ロマン派の思想は、資質的にも夢想家の未明をとらえて離さなかった。

未明のこの期の童話には、孤児、浮浪者、乞食、旅芸人、行商人など、流浪する貧しい人びとが多く登場する。「阿呆鳥の鳴く日」は、社会に痛めつけられた孤児と失業青年の弱者同志が助けあい、二人が自

由と安住の地を求めて漂泊の旅に出る話だ。遠い雲の彼方へのあてどなき漂泊の感情は未明童話の一特色である。秀作「金の輪」での子どもの死のように、希望を挫折させる「死」の不条理も、その童話のテーマに多い。

情感の暗さや、物語としての論理を欠く一部の作品から、未明童話の児童文学としての否定的評価が、戦後の昭和三十年代から今まで、跡を絶たない。しかし、ここに詳述できぬが、未明童話が大正デモクラシーの時代が生んだ新児童文学であったことは、文学史の事実だ。その童話の不安な情緒は、短期におわったデモクラシーの終焉を予感していたごとくで、十五年戦争の暗い谷間の時代に、未明のロマンチズムは消えた。

未明童話のあこがれと幻滅の美が、今も学生たちをとらえるのは、観念的ではあっても作品の底に強いヒウマニズムが流れているからではないかと私は思う。それにしても未明の童話自体が、様が変わりした現代に、安住できぬ新たな漂泊の旅をつづけていくように思われてならない。